偕行社の建造物文化財調査

泉　田　英　雄

1．はじめに

愛知大学短期大学本館は、明治42（1909）年5月に旧陸軍第十五師団偕行社として建設され、大正14（1625）年5月の同師団廃止後も、再編された陸軍教育機関の将校社交場他として使われた。第二次世界大戦後の昭和21年11月、愛知大学に移管され、同大学短期大学部本館として用いられた。陸軍第十五師団の設立に関しては『明治軍事史：明治天皇御伝記史料』（陸軍省編）収録の参謀本部文書によって、また豊橋市での開設過程に関しては『豊橋史第三巻』によってそれぞれ概略を知ることができるが、偕行社を含む個々の建築の形態と構造については不明な点が多い。建設直後の姿を『大正天皇愛知懸聖蹟史』が若干述べていることから、これらを参考にし、現地調査の結果とつきあわせながら、本建築の特徴を明らかにしたい。

2．沿　革

陸軍第十五師団は、日露戦争の最中の明治38（1905）年に編成され、満州と朝鮮に派遣された。終戦とともに帰営し、東海道沿線に衛戍地を求めていたところ、豊橋市の積極的誘致運動により、明治40年9月17日に市南部の高師村に設置場所が決まった。早速敷地の買収と造成が行われ、明治41年2月7日から主要施設建築工事が始まった。この工事は臨時陸軍建築部名古屋支部が管轄し、施工は工費180万円、工期9ヶ月で大林組が工事を請負った。

明治41年8月に師団司令部が竣工し、翌年5月までに主要施設が完成した。これとは別に、工事開始時期は定かではないが、明治42年5月に偕行社が師団司令部の東隣に、明治45年5月に師団長官舎が北側の高師村大字福岡字小松（現石塚町）にそれぞれ竣工した。両施設とも師団司令部所在地には必要不可欠なものであるが、衛戍地の中では少し性格の異なるものであり、別途工事として進められたのであろう（図1）。土地取得も師団司令部と一緒に行われなかったために、既存の建物に邪魔されて東側境界は既存の境界線と一直線ではなく、偕行社敷地で4メートルほど西側に寄ることになった。現在、愛知大学敷地の東通りにクランクが見られるのはそのためである。

偕行社は完成して間もなく、明治43年11月の皇太子殿下行啓に際して御宿舎にあてられることになり、その準備の様子が『大正天皇愛知懸聖蹟史』に書き記されており、完成当初の建物の配置、間取り、外観を知ることができる（図2）。

図１　大正10年前後の第十五師団

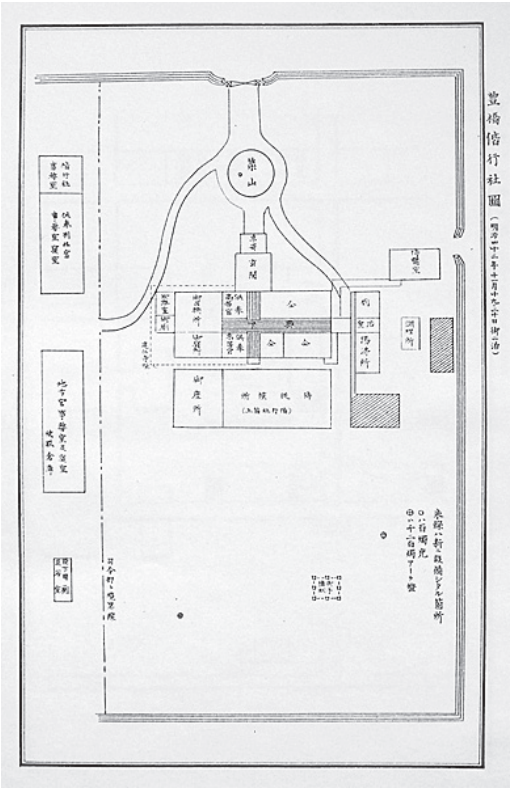

図２　『大正天皇愛知懸聖蹟史』の偕行社

３．施設建物概要

偕行社の敷地は、他の師団所在地と同じように施設建物に比して広い敷地があてがわれた。ここのほぼ中央に偕行社建物が配置され、北側に進入路が設けられたことから、当初から北側を広場、南側を庭園とすることになっていたことがわかる。現在、偕行社建物の手前には割合大きなロータリー（円形路）が設けられているが、これは当初のものではなく、『大正天皇愛知懸聖蹟誌』（図２）に見られるように、もともとはポーチコ（車寄せ）近くに小さなものが作られていた。おそらく、昭和時代になり、自動車が構内に入ると、この小さなロータリーでは旋回が難しく、少し離れたところに規模を大きくして移されたのであろう。

建物自体は、東西に長い総二階建ての建物で、北側中央に玄関・階段室が張り出し、さらにポーチコが取り付き、凸状の外観をしている（図３、４、５、６）。建物東西方向には寄棟屋根が、また玄関・階段室上には入母屋屋根がのる。南東角には二階への簡単な階段が取り付けられており、非常用のものと考えられる。

現在、ポーチコの屋根は寄棟形式になっているが、『大正天皇愛知懸聖蹟誌』に掲載された写真によれば陸屋根であり、その周りにバラストレード（欄干）が巡らされていた（図７）。そして、この屋根をオーダー付きの三本角柱が支え、桁との接合部には雲形の肘木のようなものがつき、さらに軒下にコーニスを配していた。一般的に陸屋根は雨漏りの原因となりやすく、この場合もそのためにポーチコ屋根の修理に合わせて寄棟屋根にし、

図 3　偕行社北側写真2011年 8 月10日撮影

図 4　西側写真2011年 8 月10日撮影

図 5　北側立面図

図 6　西側立面図

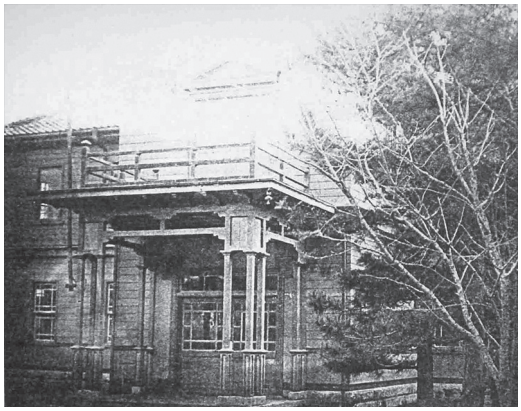

図 7　建設当初の北側正面　『大正天皇愛知懸聖跡誌』より

また 1 階周りの角柱を合板で覆って大壁式にしたのであろう。ポーチコの屋根だけではなく、他の部分の屋根も何度か葺き直しされている。

ポーチコの角柱やバラストレード、外周の上下窓（あげさげまど）とドイツ下見板（箱目地下見板）は西洋建築の特徴であるが、玄関上の入母屋の屋根形態と桟瓦の屋根葺き材料は和風であり、和洋折衷建築の印象を与える。明治初期から中期にかけて、西洋建築を見様見真似で日本各地に作られた擬洋風建築に対して、これは実用性を第一にして、非常に抑制の効いた折衷様式となっている。

4．平面と構造

偕行社は将校の社交場であり、基本的に1階に受付や事務室などを置く他は大小の複数の広間で構成され、2階は多くの人数が一堂に会する場所として、途中何も遮るもののない大広間となることが多い。そして、ここに出入りするための主階段室が外に張り出すように取り付き、また2階から避難階段が設置されることになる。

以上の基本形式がこの建物にもあてはまり、はじめから偕行社として計画、建設されものであることがわかる。玄関から入ると1階は中廊下式になっており、右手に受付や事務室が、左手に広間が並び、2階は大広間になっていた。皇太子殿下の御宿舎として使われるときに、新たに若干の間仕切りが施され、さらに愛知大学短期大学部本館として用いられている時に2階が大きく改装された。後付けされた間仕切壁かどうかは材料と構造から容易に判別することができ、それを撤去すると、最初期の平面図は図8と図9のようになる。

構造は、他の師団施設建築と同じように、組積造の基礎の上に木造軸組が載り、さらにトラスの小屋組が屋根を支えている。主要構造材は角材であるが、大引、束、母屋などには丸太をそのまま用いており、短い工事期間への対応と考えられる。もう一つの特徴は、補強金物を多用していることで、濃尾地震後に推奨された構造補強方法が取り入れられた。さらに、構造力学に対する理解が進み、トラスのキングポストは引っ張りに強い鉄棒を用いている（図11）。

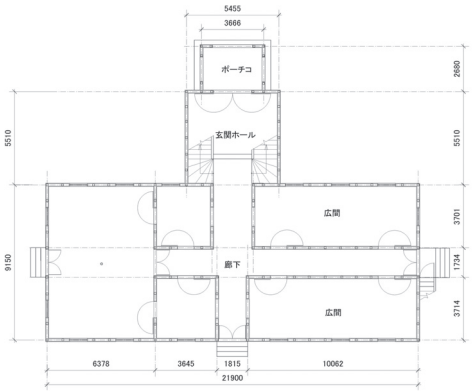

図8　1階平面図

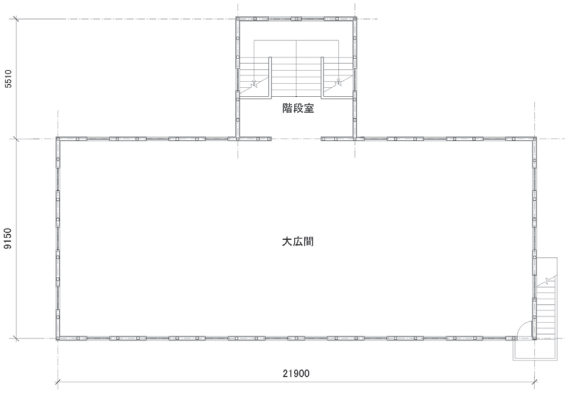

図9　2階平面

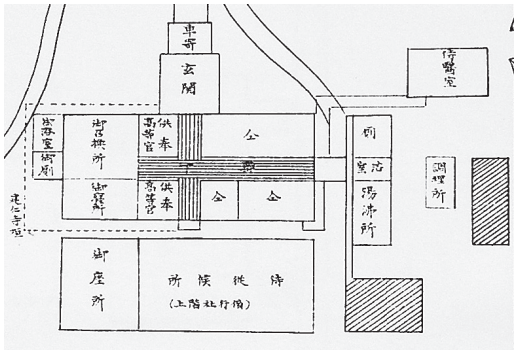

図10　皇太子殿下御宿舎の配置

図11　小屋組　左手に鉄筋のキングポストが見える

図12　階段室と手摺

図13　照明器具収納飾り

図14　避難階段の床下の木組

図15　陸軍紋章の入った通気金物

5．内外装

廊下と部屋に関わらず当初の室内は、床をフローリング（床板貼り）、壁を漆喰塗り、そして天井を板張りペンキ塗りとしていた。床と壁の境には木製幅木、壁と天井の境には繰型の施された回縁が巡らされており、また階段室には美しい手摺と手摺子が、さらに天井照明器具回りには六角形の木製枠が取り付けられている。

外部は、腰壁付き箱目地下見板貼りの上にペンキ塗り仕上げとしており、全体としてみれば内装は西洋建築の作り方をしている。

6．まとめ

第十五師団偕行社は、はじめから偕行社として計画、建設されたもので、明治42年5月に竣工して、一年半後に皇太子行啓の御宿舎に使用された。軽微な間仕切が付け加えられただけで、すぐに元に戻された。建物の内外観は基本的には西洋木造建築の作り方をしているが、木造細部に若干の和風意匠の混在が見られる。短期間で完成させるために、陸

軍建築として標準の下見板貼りと上下窓とし、用いる材料の種類も制限していた。しかしながら、濃尾地震後の構造補強の考え方が採用され、補強金物が多用されていた。

参考資料

『大正天皇愛知懸聖蹟史』昭和５年３月
『明治軍事史：明治天皇御伝記資料』昭和41年
『豊橋市史　第三巻』昭和43年

既往研究

1．小野木重勝「旧陸軍第十五師団指令部庁舎」日本建築学会関東支部研究報告集 1992年
2．小野木重勝「旧陸軍第十五師団長官舎」日本建築学会関東支部報告集 2000年
3．小野木重勝「旧陸軍第十五師団将校集会場・偕行社」日本建築学会学術梗概集 2001年

（豊橋技術科学大学准教授）